

武蔵野日曜聖書講筵

聖翼

——詩篇第63篇——

1976年10月10日

小池辰雄

神助け「神」は我々にとってはキリスト キリストと生命的な一如の世界 つばさの蔭・風のつばさ 翼のかけに入ると力がくる 翼の下に集めん 自分自身が聖霊の翼をいただいて天翔る 願いの現実の中にどしどし入っていく

【詩篇63】

ユダの野にありしときに詠めるダビデのうた

1 ああ神よなんじはわが神なり。

われ切になんじをたずねもとむ。

水なき燥きおとろえたる地にあるごとく、

わが靈魂はかわきて汝をのぞみ、

わが肉体はなんじを恋したう。

2 曩にも我かくのごとく大権と栄光とをみんなことをねがい、

聖所において目をなんじより離れしめざりき。

3 なんじの仁慈はいのちにも勝れるゆえに

わが口唇はなんじを讃めまつらん。

4 斯われはわが生くるあいだ汝をいらい

名によりてわが手をあげん。

5,6 われ床にありて汝をおもいで

夜の更るままになんじを深くおもわん時、

わがたましいは髓と脂とにて饗さるるごとく飽くことをえ、

わが口はよろこびの口唇をもてなんじを讃めたたえん。

7 そはなんじわが助けとなりたまいたれば

我なんじの翼のかけに入りてよろこびたのしまん。

8 わがたましいはなんじを慕い追う。

みぎの手はわれを支うるなり。

9 然どわがたましいを滅さんとて

尋ねもとむるものは地のふかきところにゆき、



10 又つるぎの刃^はにわたされ野犬の獲^うるところとなるべし。
11 しかれども王は神をよろこばん。
神によりて誓いをたつるものはみな誇ることをえん。
虚偽^{いつわり}をいうものの口はふさがるべければなり。

●神助け

詩篇第63篇は、神との非常に深い、祈りの交わりの境地がでている大変大事な詩篇です。
ユダの野にありしときに詠^よるダビデのうた
果たしてダビデかは別問題です。

「ああ神よなんじはわが神なり。
われ切になんじをたずねもとむ。
水なき燥^{かわ}きおとろえたる地にあるごとく、
わが靈魂^{たましい}はかわきて汝をのぞみ、
わが肉体はなんじを恋したう。

神に呼びかけて切々たる言葉は、詩篇63篇の1節のごときはまれであります。非常に力強い深い言葉ですから、よくこういうのは身につけたほうがいいです。

「ああ神よなんじはわが神なり」

という、こういう表現ですね。

「エロヒーム エリー アッター」

という字ですが。「エロヒーム」といつて神に呼びかけて、「エリー アッター」と。

「エリ エリ ラマ サバクタニ」

という、キリストが「エリー」「わが神」と言う。「アッター」「汝は」。「なり」というような言葉はないんです、ヘブライ語には。

「わが神、汝は」

ということ。もちろん、「なり」という言葉は別に独立した言葉はありますけれども、普段こういうときには使わない。

「神よ、汝はわが神なり」

「神さま、あなたは私の神さま。あなたがなくてはどうにもならない」ということが

「わが神なり」

ということ。生活において他のもので代用のきく人たちは、神さまに呼びかけない。文化文明のいろんなことで、人間がつくりだした様々のことによつて満足している人は神にはこない。人間のつくりだしたどんなことでも、

「もうどうにもならん」



と言う人が本当に神さまにくる。人間は、本当はそういうわけなんです。どうかなっているような顔しているけれども、実はどうにもならないんです。なぜ早くどうにもならないことに気がつかないですかね、みんな。いつも申し上げているとおり、

「本来、人は宗教人である」

ということ。我々は、助けを必要としない人はひとりもない。「人助け」という言葉はありますが、「神助け」という言葉はあまり使わないけれども、本当は神助けがなければどうにもならないし、また神助けがあれば、あとはどうなってもいい。

「どうにでもなりやがれ」

と、私は時々言いますが、もうどうなってもいいんです、あとは。本当に神助けを持っていれば。

私は今、70歳を多少越えています、どういうものだから、もの凄く力があります。魂の力というものが、いよいよその度合いが深められていくので、私は自分で不思議ではない。ということは、まあ慨嘆すべきことがたくさんあるし、また憤慨することも、敵もたくさんいるし、ボヤボヤしていられないからでしょうね、ひとつは。そういう意味において本当に私は非常に戦闘的であります。まあ今度の10月23日も、講演会（キリスト道講演会 演題『南無キリスト』於東京YWCA）だけでも、いわゆる講演会のつもりではない。何とも言い難きものになると思います。

●「神」は我々にとってはキリスト

「神よなんじはわが神なり」

「あなたは私の神で、私はあなたがなければどうにもなりません」

という気持ちでもってこの一句を読まなくてはいかん。そして、この「神」も、神を呼ぶと同時に、我々にとっては、「キリスト」なんです。キリストがいなければどうにもならないし、キリストにすればはつきりと神はつかめるのであって、キリストにこないで神をつかまえたと思つたって、あるいは神を呼んでいると思つたって、それはまだ多少浮いてしまっている。具体的な実証体、神の実証体、神を実際身をもって証した人はキリストなんですから。イエスをぬきにして、「神」なんて言つたってしょうがない。

パウロが「神」と言っているときにも、必ず「キリスト」がそこにあるわけなんです。マルチン・ルターが旧約聖書を読むときも、「ヤーヴェー」、「ヘル」（主）というところを「キリスト」という気持ちで彼は読んでいた。そういう具体的な、

「汝はわが神なり」

と。「神」と呼んで一向に差し支えないけれども。あるいは「父」と言おうが、いつも

「キリストがその中にいる」

ということがはつきりと意識していなくては。



「われ切になんじをたずねもとむ」

これで思い出すのは詩篇42篇です。

「ああ神よ、しかの溪川たにがわをしたい喘ぐあえがごとく、わが靈魂たましいもなんじをしたいあえぐなり。²わがたましいは渴けるごとくに活神いけるかみをしたう。何れいずのときにか我ゆきて神のみまえにいでん。」(詩篇42・1〜2)

詩篇42篇の1節も非常に深い。

「谷川の水をあえぎ求めている鹿のように、私の靈魂たましいはあなたを求めています」と。

「尋ねよ、さらば見出さん」

といいますが、

「切に汝を尋ね求める」

ということです。

水なき燥きかわおとろえたる地にあるごとく、

これは曠野で、砂漠がその環境であるらしいです、この詩人は。

わが靈魂たましいはかわきて汝をのぞみ、わが肉体はなんじを恋したう。

「わが靈魂たましい」というこの「たましい」は「ルーアツハ」(靈)ではなくて「ネフェシュ」(魂)という字が使つてあります。旧約ではおそらく、「ネフェシュ」の方が度数としては多いでしょう。「ネフェシュ」というのはちょうど英語でいうと「ソウル」(魂)の方です、「スピリッツ」(靈)でなくて。「スピリッツ」は「ルーアツハ」。ドイツ語でいうと「ゼーレ」(魂)です、「ガイスト」(靈)でなくて。

この「わが魂」という言い方は、あるときは「我自身」というような時の言い方に使うこともあります。ここでは明かに、その次に「肉体」という言葉がありますから、霊・肉の「魂も肉体も」ということ。

●キリストと生命的な一如の世界

「かわきて汝をのぞみ、わが肉体はなんじを恋したう」

「恋したう」はドイツ語で「シュマツハテン」(schmachten)という、非常に「あえぎ」がれているような言葉です。本当に全存在が、

「魂も肉体もあなたにしがみつく」

という。水なきおとろえたる所で。お腹がすいているよりも喉が渴いている方がつらい。水だけは普通の断食では飲みます。というのは、水がなくなると本当に――人間のからだの90%は水ですから――渴きというのはつらい。だから、喉がかわいた時に、真清水を飲むくらいおいしいものはないわけです。そういうように、魂が本当に飢え渴いている。

「義に飢え渴く者は幸いなり。その人は飽くことをえん」



とキリストが言われた。その義という、神の義。「神の義」はキリスト自身です。

「キリストに飢え渴く者は幸いである。その人は飽くことをえる」

ということ。あなた方は福音書を読んで、本当にキリストをそのように慕い求めて、

「キリストがあればもうどうでもいい」

と、本当にそういう気持ちになって読んでいますか。

「わが靈魂はかわきて汝をのぞみ、わが肉体はなんじを恋したう」

と。この63篇1節は切々たる句です。そしてまた、この神・キリストに全存在に満たされる。

「飽くことをえる」という。満たされるときこそ、これはもう具体的にいうと、

「聖霊に満たされる」

ことです。聖霊が臨んできますから。そうしたらば、

「この水を飲む者は渴くことなし」

とキリストが言われた。ヨハネ伝4章でサマリヤの女に。ですから、このキリストという

聖霊の水を飲むと、渴くことをしらない。そういう、

「生命的な一如の世界」

です。私は、

「一如」

なんていう言葉をよく使うけれども、

「こういう言葉は神秘的だ」

と言って、いわゆる無教会の人たちは退ける。嫌う。だから、無教会はいつまでたつても本当の世界に入らない。「神と我」「キリストと我」というものを非常に対立的にいつも考える。そして、それを「信ずる」という。対象的なんだ。そういう意識が強すぎる。

「汝と我」というが、「汝と我」は――「汝と我」でいいさ――けれども、パウロは、

「我なんじのうちに、汝わがうちに」

という一如の世界をちゃんとやっているじゃないですか。キリスト自身も、

「自分ではない」

と言っているじゃないですか。私はこういうことをしゃべっていると、もう腸はらわたの中には異言が来ているんです。本当は異言が爆発しそうなんだけど、こらえている。

そういう現実の中に入っているから、何とも知れないところの生命が正直きっているわけです。聖書を読んで、その現実本当に直ちにはいる。読むことが直ちに祈りなんです。だから、私は言っているんだ、「祈入」、祈り入ると。

●つばさの蔭・風のつばさ

詩篇17篇の8節に、

「願わくはわれを瞳ひとみのごとくにまもり、汝のつばさの蔭かげにかくし」(詩篇17・



8)

とある。

「瞳のごとくを守る」

という。「瞳のごとく」というのは、瞳の中に他の人の像が映るでしょ。

「相手を見ていると、瞳の中に人の像が映る。そのように守ってください」

ということですが、この「瞳の如く守る」というのは。

「汝のつばさの蔭にかくし」

という。雌鳥が雛鳥を翼の蔭に入れるでしょ。あれがまさにこの「つばさの蔭」です。キリストの言葉にありますね、あれはみんな旧約からきている。キリストもそれを思い出して言われたんでしょう。マタイ伝23章にある。

それから18篇にもある。10節に、

「かくてケルブに乗りてとび、風のつばさにて翔り」(詩篇18・10)

と。「ケルブ」というのは天使です。この天使は六翼のつばさを持っている。

「エホバは天をたれて臨りたもう。その足の下はくらきこと甚だし」(詩篇18・

9)

なんて、おかしいことが書いてある。神さまを、足だの、手だの、鼻だの、目だのと、いろいろなことをいう。けれども、決して偶像にしない。非常にわかりやすい表現で言っても、偶像は作らない。そこが非常に健全なわけです。

「風のつばさ」

というのはいいいね。「歌のつばさ」なんていう言葉もあるけれども。風は今度は聖霊に通ずる。御霊のつばさ。新約的には、

「聖霊のつばさ」

だ。それはそうだよ、

「聖霊、鳩のごとく臨んできた」

と。つばさを持った鳥のように聖霊が臨んできたという。

私はもし人間でなければ、鳥になりたいな、文句なしに。空を飛べるから。時々、空を飛ぶ夢をみたりする。この頃の人にはあまりに現実的すぎるのではないかね。私みたいに空飛ぶ夢なんか見るかね。これがその「風のつばさ」です。

「風のつばさにて翔り」

という。これは「つばさの蔭」ではなく、風のつばさで翔る。御霊のつばさで天翔るんです、世界中を、それから宇宙を。宇宙旅行なんてものはいらんよ、私の魂は勝手に宇宙旅行ができるからね。まあ私のそのうちに書く詩は、すごい現実が出てくるから。それは絶対に言わないことにする。楽しいね。

それから、36篇の7節、



「神よなんじの仁慈いつしくみはとうときかな。人の子はなんじの翼の蔭にさけどころを得」(詩篇36・7)

という。

「エホバよなんじの仁慈いつしくみは天にあり、なんじの眞実まことは雲にまでおよぶ」(詩篇36・5)

と。こういう詩的な文句を楽しいと思わないですか、あなた方は読んで。そういう文句を読んだらば、そのような現実に関心を入れなくてはダメですよ。雲であろうと、天であろうと、何であろうと、みんなこの風の翼でもって私たちの魂は自在に動いている。そんな地面にへいつくばってなんかいませんよ。

こういう言葉だつてあるではないか、「雄飛」、雄飛せよ、飛べと。私は獨協大学の校歌の第3番にこの「雄飛」という言葉を使つてある。

〔註：獨協大学校歌の第3番「万国の文化の粹すいを／大和心やまとこころに豊かに集め／独創た妙えなる業わざを積み／世界に雄飛の大志を抱く／わが獨協の学風ゆかし／眞理を愛して生命いのちあり／天に即して大和たいわあり／ああ創造の精神は広し」小池辰雄作詞〕

「神よなんじの仁慈いつしくみはとうときかな。人の子はなんじの翼の蔭にさけどころを得ん」

と。汝の避け所、即ち、

「汝の翼の蔭にさけどろを得ん」

と。

「深いいつくしみの中に」

ということ。「翼の蔭に」という。親鳥の、雌鳥の翼の蔭だから。人間でいえば、

「母のふところ」に

というわけだ。

●翼のかげに入ると力がくる

それから、57篇1節、

「我をあわれみたまえ、神よ、我をあわれみたまえ。わが靈魂たましいはなんじを避所さけどころとす。われ禍害わざはひのすぎさるまではなんじの翼のかげを避所とせん」(詩篇57・1)

とにかく、詩篇の作者というのはいろんな患難にでつくわして、そして書いているんだからね、いい加減な現実で書いているのではない。

「なんじの翼のかげを避け所とせん」

と。翼のかげに入ると力がくる。なんでも、力を得なかったらしょうがない。力を得なかったら、その蔭に隠れて眠ってしまったら。その蔭に入ったら、御力がくるんです、力が。



安息日というのは、安息日に私たちは聖書をそのようにしてくらって、力を得るんだからね、原動力を。ただ体裁でやって来ている人はいないし、私もそんな体裁なんかでこの集会をしてやしない。だから、この秋からはつきり言っている。

「この集会に来なさい。来たら必ず続けて来なさい。出たり入ったりはもう許さんぞ」

と。そういうことなんですよ。

それからまだあります、61篇4節、

「われ永遠とこしえになんじの帷幄あけぼりにすまわん。我なんじの翼の下にのがれん」(詩篇

61・4)

こんなに「つばさ」という言葉があつたかと思うでしょ。それからこの63篇。それから91篇4節、

「⁴かれその羽をもてなんじを庇おほいたまわん。なんじその翼の下にかくれん。

その真実まことは盾たてなり干なり。……⁷千人はなんじの左にたおれ、万人はなんじの右にたおる。……」(詩篇91・4〜7)

91篇は神の護りを力強くうたつた詩篇です。

そのうちに、「詩篇の珠玉」というのを私は一冊にしますから。もうその一冊を読んだら、楽しくてしょうがないようなのをひとつ書きます(著作集第4巻『詩篇珠玉集』1980年刊)。それから104篇3節。これも「風の翼」だ。

「水のなかにおのれの殿の棟梁うつぼりをおき、雲をおのれの車となし、風の翼にのり

あるき」(詩篇104・3)

と。この104篇というのは実におもしろい。本当に、「へえー」なんて思つて読む。長い詩篇だけれども。これが「風の翼」だ。まあだいたい、詩篇ではおそらく今あげたところだけかと思ひます。

●翼の下に集めん

最後に、マタイ伝23章37節。キリストがエルサレムを臨んで、嘆かれた言葉です。

「³⁷ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣つかわされたる人々を石にて撃つ者よ、牝鷄めんどりのその雛を翼の下に集むるごとく、我なんじの子どもを集めんとせしこと幾度いくたびぞや、

「なんじの子ども」といったつて、これは「エルサレムの子ら」ということで、エルサレムの人々、イスラエルの人々ということです。

されど汝らは好まざりき。³⁸視よ、汝らの家は廃すてられて汝らに遺のこらん。³⁹われ汝らに告ぐ『讀よむべきかな、主の名によりて来る者きた』と、汝等のいう時の至るまでは、今より我を見ざるべし」(マタイ23・37〜39)



「もうやがて自分は十字架だ」

ということです。

「預言者たちを殺し、^{つかわ}遣されたる人々を石にて撃つ者よ」

と。伝道者が今までに歴史において殉道の死をとげたり、それから本当に伝道しても、なかなか人はついて来ない。もう愛想をつかしてしまうと。キリストの嘆きは、その全体を代表しているような嘆きです。

まあそうだね。私は学校の校長をしているけれども、いろんな折りに言うが、なかなか福音の世界には求めようとしないうけです。みんな適当なところで満足してしまっておしまい。ところが、本当はそれではダメです。

学校教育よりも――学校教育はもちろん大事です。だけれども、先生方が自覚しなければどうにもならない――家庭におけるところの子どもの育て方が大事です。これはなにも福音を教えるのではない。けれども、本当に魂の育て方をしていくことです。もう日本の将来はただ、これからの親の在り方、これからの先生方の在り方にかかっている。今の若い者がどうだこうだなんて言ったって、そういうのをつくってしまったのは誰だというと、親と学校の先生です。責任重大なんだ。

私はもちろん自覚はしていたけれども、なかなかついてこないから、しょうがないという嘆きがある。けれどもとにかく、言うだけのことは相当言ってますから、あとになって時々、

「小池先生の授業は非常に印象深かった」

ということとは時々聞く。でも、印象深いだけではダメなんだ。本当にそれを「そうだつ」と言って福音の世界に入ってこなくては。

だから、私は今度の講演会のビラに書いた。

「現代日本の精神状況をみるに、宗教に対する渴望は確かにある。宗教界は果たしてこれに応えているであろうか。我らは宗教活動の一端を承って、ここに福音の原点に還らんとする警鐘を打ち鳴らさんとする。二十世紀の文化文明は、その根底に今こそ宗教心をもつのでなければ、世界は何処へ行くと問わざるを得ない」

と。そういう趣旨であります。まあ一場の講演がどれだけの果を結ぶかは、どうでもいいです。ただし、為すべきことを為さざるを得ないというだけののはなし。しかし、皆さん、無駄な使い方はありませんが、「この人は」というような人にはこのビラを送ってやってください。それが一番確実ですから。会場は200人くらいしか入れません。そんなに大勢来るとは思いませんけれども、まあ大体は200人くらいは来るような気はします。

●自分自身が聖霊の翼をいただいて天翔る

聖翼^{みつばさ}という。さっきの「風のつばさ」とか「翼のかげ」という、二つの表現があらわしているように、



「キリストの中に入る」

ことが

「翼の中に隠れる」

ということ。また、

「風の翼に乗りて」

というのは、聖霊の翼を自分が持つて、

「自分自身が聖霊の翼を持つて自由自在に動く」

こと。この二つの面を、私はこの「聖翼」^{みつばさ}という言葉においてはつきりとつかまえないから、出したわけです。

申命記32章10節から、

「¹⁰エホバこれを荒野の地に見、これに獣の吼る曠野^{ほゆ}に会い、環^{めぐ}りかこみて之をいたわり、眼の珠^{たま}のごとくにこれを護りたまえり。¹¹鷺^{わし}のその巢^{すびな}を喚起^{よびおこ}しその子の上にまい翔^かけるごとくエホバその羽^{のべ}を展^のて彼らを載せ、その翼をもてこれを負いたまえり。

神さまはその翼に乗つて、イスラエルの民を背負つて動いたと。曠野の旅をこんな素晴らしい表現でもつて言っているわけです。

¹²エホバは只^{ただひとり}独^{ひとり}にてかれを導きたまえり。……」（申命記32・10、12）

翼に乗つて、この神さまは、キリストは、翼の蔭に宿すとともに、今度は翼に乗つてくださる。どのみちそれは、聖霊を本当にうちに宿すということと、また聖霊の翼でもつて――『聖霊の翼の蔭に』という本をいつか書いたことがありますけれども――その聖霊の翼を持つて、自分自身が聖霊の翼をいただいて、そして天翔^{あまかけ}る。そういう式のちよつと夢をみたことがある。今度の第2巻（『芸術のたましい』／詩「七夕の霊夢」／1976年刊）に出てきます。私の手が翼みたいになつてしまうわけです、夢の中で。

寝る時にね、あなた方は何を祈っているんだい。

「夢の中で素晴らしいことを教えてください」

と祈る。何かある具体的なことでもいいし。そうすると、明け方に近くなるというと、へえーなんて思うことがある、時々。なにしろ、この聖書の言葉が言葉でなくなってしまうんですよ。本当にこの現実になつてくる。私の身体の中に生きてくるわけだね。だから、願いが幻に出てきてみたりする。

●願いの現実の中にどしどし入っていく

私たちはこの「つばさ」という言葉に、そのような自由自在な虚空^{かけ}を翔^かるすがたを見る。飛行機には軌道がない。無軌道です。鳥は無軌道、そして自在に風の法則にのつかって動く。こないだドイツでグライダーを私は見たのだけれども、あれはいいものだね、本当に



楽しそうだ、風にのっかってね。それでも、いくらグライダーやどんな飛行機ができようが、それは鳥自身にはかなわない。鳶とびが飛んでいるところを見たってね、燕つばめが飛んでいるところを見ても。鳥が飛んでいるのを見るのが私は大好きなんだ、ジーツと。そして、冥想するんです、私は。自分がその鳥となる。鳥となると、魂がまさに聖霊の翼をもつような魂になる。だから、本当に自在な境地に入っていく。

願いというものは、ただ願っただけではなくて、願いの現実の中に同時にどしどし入っていかなければダメですよ。この詩篇なんかを読んでも。でなかったら、つまらないですよ、その現実の中に入っていかなくては。あるいは、詩篇もその言葉の奥が言い切れないで困っているんだから。その奥をどしどし読んでいく。もうその「概念的規定だの、限定だの」をしているうちはダメ。いいですね。そうかというと、

「小池先生はいつたいわけの分からないことを言うな」

なんて。それはちよつとわけが分からないよ。けれども、非常にわけが分かっている。これは何といいますかね、ドラマチックでそして非常に有機体的な構造です。だから、説明できない。けれども、あるところをグツとつかむという、その先がみえてくる。また、自分でもって創造的に展開していく。だから、一つの御言を本当に身に体してごらん。その現実に入ってごらん。そうしたらば、なんともいえない楽な現実になる。そこからまた創造してやまないとこのものが出てくる。

詩篇63篇は本当に

「全存在が汝と一つになる」

ということを力強く言って、そして、汝の御霊の世界に入るというと、ビフテキを食べたようなことになってしまう。

「夜中眠られない」なんてなことになったら、くだらないことを考えないで、直ちに床とこの上に坐って祈りこみなさい。そうしたら、本当に楽しくなって、楽にキリストの懷の中にはいって寝れますよ。「眠れない」なんて、それは信仰衰弱だ。神経衰弱でない。だから、眠れても眠れなくても、どっちでも結構なんだ。それだけ自在な魂にならなければダメですよ、現実にはヘコたれては。それはもうとにかくキリストの中にはいつたら、そうなりますから。そして、「聖翼みづばさの上」どころではない。自分自身が聖翼をいただいてしまつて動き出すようなことになる。

「汝の翼を我にたまえ」

なんていう言葉はどこにも書いてない。けれども、そういう現実になつてしまふ。そういう読み方が本当にキリストは喜ばれるんです、「そうだつ」と。決して単なる主観ではないんです。どうぞそういうことで、本当の一如の自由自在な世界を、この「聖翼みづばさ」という一語において私たちは今日受けとつたということです。おしまい。

